



まちのたから

発見



日野町内に残る城跡を訪ねて

大規模な堀の跡が残る戦国時代の城跡

「佐久良城跡」



▲佐久良城跡全景 (佐久良)

日野町内には約30の城があったとされます。その内、今でも跡が残っているのは、14か所ですが、残念ながら建物は残っていません。とはいえ、城跡の形や大きさには様々なものがあり、非常に見ごたえがあります。今回はその中から、戦国時代の特徴が良く残る「佐久良城跡」を紹介いたします。

●佐久良城の歴史

佐久良城は、佐久良地域の住宅の背後、高さ40mほどの丘に造られました。いつ造られたのかはわかりませんが、応仁元(1467)年の10月

に、永源寺から東桜谷一帯を治めた武将である小倉寛澄が、京の名僧たちを「佐久良城と考えられる」佐久良の私亭に招いています。寛澄のひ孫の代には、蒲生家から實際が養子として入り、当時近江を治めていた六角家の家臣として活躍しました。ところが、永禄7(1564)年3月に行われた合戦で實際は亡くなってしまい、しばらくして佐久良城は廃城になったと考えられます。

●今も残る多くの跡

佐久良城は、丘の上を中心に、東西約250m×南北約

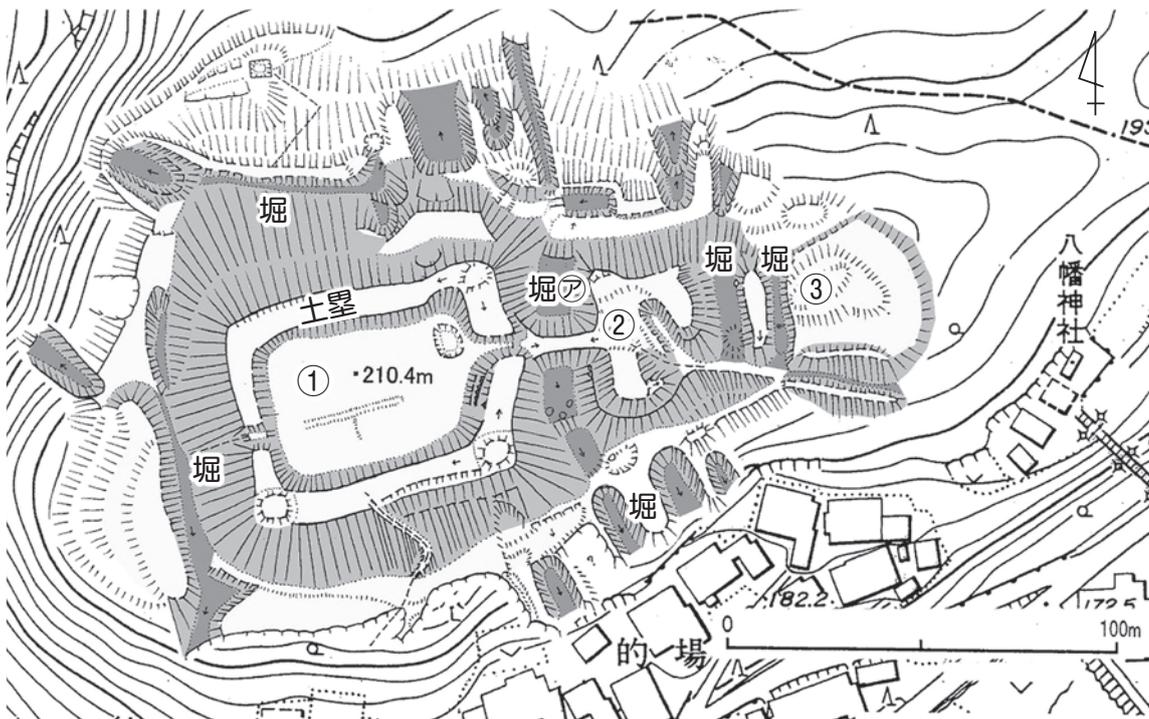
160mの範囲に築かれています。戦国時代の多くの城は、「城」という漢字が表す通り、まさしく土によって造られました。佐久良城も人の力で丘を削り、建物を建てたりするための平地(曲輪)を造り、敵から守るための溝(堀)を掘ったり、土手(土塁)を築いており、今でもその跡を見ることが出来ます。

城の一番大切な場所として、城主の館などがあったと考えられる場所①は、約50m四方の広さで、周りに高さ約4mもの土手(土塁)を築いています。さらにその周りを、深く広い堀などで囲む重なる造りとなっています。中でも正面を守る堀②は、幅約20m、深さ約11mという大規模なもので、工事を行った人々の苦勞がわかります。①から②へは、細長い土の橋だけにつながっていて、敵が攻め込みにくくしてあります。また、この付近では、斜面に低く石を積み上げた跡が残ることから、壁が崩れにくくする対策がとられたことがわかります。

また、②と③の曲輪の間や斜面にも多くの堀が造られて

おり、ここでも敵の攻撃に備えた跡を見ることが出来るのです。このように佐久良城は、大きく壊れてしまつことなく、

戦国時代の武將の城として、また丘に造られた土造りの城の姿を私たちに伝えてくれているのです。



▲佐久良城跡概要図